



祝 2023 (白泡)

ドメーヌ・オヤマダ唯一のスパークリングワイン。水分と長尾のデラウェア、プチマンサン、甲州を使用。『祝』というのは昔の村名で、明治8年に、上岩崎村・下岩崎村・藤井村が合併した際に、岩崎の『いわ』と藤井の『い』を足して『いわい』としたところに『祝』の字をあてたと言われる。一説では雨宮 勘 解 由 が甲州を初めて発見した場所とも言われ、日本のワイン造りの歴史から見ても、後世に残していきたい地名である。このワインの畑は標高が約500mで、BOW! 白用の万力周辺のデラウェアと比べて成熟がゆっくりで、スパークリングにとって重要な酸を残しやすいという特徴を持つ。

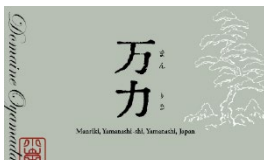
2023年はデラウェアが夏の雨にやや当たりベト病が少し蔓延したが、天候がよかったことに救われボリュウムが出ている。甲州は収量が取れるヴィンテージだったので良好。長尾のプチマンサンは年中ブドウオトリバを気合を入れて駆除したおかげで収量は確保できた。

出来上がったワインは、デラの白い花の香りに柑橘が広がり安定の酒質。例年より甘味を少し感じるところに飲みやすさがある仕上がりとなっている。

水分 (みずわけ)：甲州市勝沼町下岩崎水分。棚仕立て。品種はデラウェア、甲州。平地。

勝沼の土壌を形成する扇状地のスタート地点にあり、川の方が分かれる地点にあることからこの地名が付いた。砂と火山灰の混成土壌。管理していた農家の高齢化によって引き継いだ畑。

長尾 (ながお)：甲州市勝沼町上岩崎長尾。棚仕立て。品種はデラウェア、プチマンサン、甲州。南向きの斜面と平地。水分とは別の土壌にあり、粘土質。小林剛士氏が管理していた畑を引き継いだ。



万力 2024 (ロゼ)

万力の単一畑のキュヴェ。棚の一枚の畑に短梢で仕立てられている、甲州、プチマンサン、シュナンブランを使用。

2024年は梅雨時期の雨も少なく万力の畑は好調だった。シュナンブランは例年通り玉割れもしたが、手入れである程度の収量が確保できた。甲州も晩腐病が出始めたが、手入れで取り除き、例年通りよく熟した甲州を収穫できた。

ワインは、香りが良くてちとトップに紅茶、ベッコウ飴、白いパンジーの様なフローラル感もある。次第に、黄色イメージでイチヨウの葉のような哀愁さを感じる。甲州のハーブ感がその中で上手に見え隠れをしているところがとても面白い。伸びる酸があり魅力的。今飲むなら繊細な香りは抜栓直ぐに感じやすい。オリをあえて多く詰めているので、混ぜると雰囲気が変わるのもまたお好みで♪

万力 (まんりき)：山梨市万力。一文字短梢の棚仕立て。南西向きの斜面につくられた段々畑。

BOW! 白のデラウェアの畑である西山、蟹沢、相干場も属する万力エリアに位置し、2/3が甲州で残りはプチマンサンとシュナンブランが混植されている。棚の骨組みだけで何も植えられていない状態で放置されていた畑を借り受け、2013年頃に植えた。2017年にやっと1樽分の収穫ができ、初仕込みを行った。



日向 2023 (赤)

日向単一のキュヴェ。同じヴィニフェラ品種の混植混醸でも、やはり山梨の温暖な気候、南向きの斜面ということもあり、洗馬とは違った個性を持つ。

2023 年は、元気モリモリ調子良く新梢身長を遂げた。夏場のベト病なども少なく、多くの品種で収量を確保できた。ムールヴェードルは房の副穂直下で割れやすいが、この年は割れても乾燥してしまい二次被害が低く比較的小さく割れが収まり収量はよかった。タナについては、最近では花穂を付けにくい印象で熟度はぼちぼち、収量は控えめ。シラーは例年になくよく熟していた。

2023 年も 2021 年からの仕込み同様に一部で手除梗を実施。収量が多かったそのほかの品種は機械除梗した。ルモンタージュ時に搾付きを行わなかった影響が発酵終了後にはアセロラやザクロのニュアンスを感じ、明るい妖艶さが残る。熟成を少し経て果実の強さがトップに出始めた。

香りにはブラッドオレンジやアセロラの様な淡赤な果実味がトップにあり、樽から来る甘い香りがよりバランスを整えている。強い飲み心地、タナからきたような酸とアルコールの強さがあり、まだ若々しい力強さを感じる。2022 にも似た様な柑橘や赤い果実の様な雰囲気は日向には特徴的だ。

日向 (ひなた) : 山梨市江曾原日向。垣根仕立て。南向きの斜面。

小山田氏が山梨で唯一所有する垣根栽培のヴィニフェラの畑。シラー、ムールヴェードル、タナを主体とした南仏系の品種を混植している。冬でも暑さを感じるほど日当たりが良い畑で、春の訪れも早い。「南の太陽」を想起させる「明るさ」や「暖かさ」の表現を、このワインのコンセプトとしている。



洗馬 2023 (白)

洗馬の畑にある白の単一のキュヴェ。ソーヴィニヨンブランやシャルドネ、その他ピノグリやロモランタン、サヴァニャン等の様々なヴィニフェラ品種の混醸。

近年は 2020 年のソーヴィニヨンブランのボリューム同様、パッションフルーツの香りやボリュームを感じる。また区画「洗馬 3」のピノグリは黒に近いほど熟し、セミヨンも少量はいるせいかハニー感やワックス風味の味わいがチラリと見えてきた印象。アロマティックな品種も段々と収量が増えてくるし、近年の太陽の熱量は果実のボリュームを上げてくるかもしれない。しかし、硬質な塩味や果実や蜜の感じが常にあるのも面白い。毎年ヴィンテージごとに楽しく変化していく“洗馬白”の中からも“洗馬白らしさ”が見えてくる。

樽での熟成時は非常に味わいも力強く、安定している。スティルヴァンを採用していることから樽で眠ってた時のような“素晴らしさ”を感じるには 2023+6 年以上の熟成が必要かもしれない。

2023 年は、主発酵終了後にはすでに、高いアルコールからくるボリュームとやや熱を感じるソーヴィニヨンブランの香りがそうさせるのか南の土地を連想させた。おそらく暑いヴィンテージがそうさせるのだと思われる。収穫前にブドウのサンプリング分析を行うが、2023 年はサンプリングしたその日がまさに収穫時期だった。日程を急に変更することが難しいのは私たちの課題だろう。



洗馬 2023 (赤)

ドメヌ・オヤマダのフラッグシップ。洗馬の畑単一のキュヴェ。カベルネフランを中心としたヴィニフェラ品種の混植混醸。

2023 年は最も過熟なヴィンテージとなった。例年、霜が降りる寸前での収穫を目指す。収穫は終わってもなかなか強い霜が降りる気配がなく洗馬では珍しく紅葉を見ることができた。この年に最も報告したいことは、忌まわしきカイガラムシが少ないことであった。毎年重ねてきたカイガラムシ除去が功を成したおかげか、果実の色づきもよかった。

仕込みはカベルネフラン主体の“本洗馬”とガメイやトゥルソーなどによる“早洗馬”に加えてタンクに入りきらない分を見越して寄せ集め“ムールヴェードル洗馬”の 3 つのキュベで仕込んだ。“本洗馬”は過熟な印象とは逆に非常に涼しさと果実の熱が混じっていた。“早洗馬”は安定の妖艶さ。“ムールヴェードル洗馬”は面白くムールヴェードルのシナモンやクローブに土の要素がしっかり出ている。構造がしっかり見えそうなブレンドとなるが、熟成を経

た洗馬の展開を更に見てみたい。

引き込まれそうな森の香りとシャンピニオン。香りは力強い。森の香りはフラン主体ならではの構成、また果皮の熟度から奥行きを感じられる。酸の質も良いが口中の香りはまだ若いのかトップからはやや単調ではあるが、ゆっくりとブラックベリーを感じる。この先の景色もじっくりと見てみたい。

洗馬（せば）：長野県塩尻市洗馬。垣根仕立て。標高 700m。小山田氏が唯一山梨以外で所有する畑。

土壌は粘土質だが、昔に川が氾濫した際に運ばれた小石や礫が土壌中に混ざっているため水はけが良い。冬がすごく厳しく、気温は頻繁に-15℃以下まで下がる。さらに春に一度暖かくなってから気温の低下と共に大雪が降ることがしばしばあり、そうすると萌芽間近で耐寒性の低くなっているブドウは、対策として藁を撒いていたとしても大ダメージを受けてしまう。この土地で最も難しいことはスムーズに萌芽を迎えること。無事に春を乗り越えることができれば、果樹を栽培するためには恵まれた気候なので、適切な管理さえすれば良いブドウが収穫できる。

ヴィンテージ情報 生産者コメント

2023 山梨（峡東エリア）

近年の暖冬、そして春先からの降雨が少なく、発芽は若干早い程度で新梢がグングンと伸長する間もあまり雨が降らなかった。野菜には雨が少なかったが、葡萄にとっては病気が少なくて幸先よし。開花期にもポイントよく防除できたおかげでその後も病気はほぼ無かった。一方で殺虫剤を撒かない分、トリバ・ブドウオオトリバの発生は早く異常に発生し続けた。2022 年からの傾向からも近年は戦い続けることになりそうである。8~9 月から降り始める雨も少なく、糖度が上がりやすい傾向となった。特に良かったのは台風雨がほとんど影響なかったことである。デラウェアは途中で糖度が上がりにくい傾向のおかげでハイアルコールにはならなかった。万力では結実のよかったシュナンブランが割れるのが相変わらずだったが、プチマンサンは実どまりもよく収量よし、日向の黒ブドウ品種も収量が例年よりも大幅に上がった。結果として収量は文句なし（大房の巨峰系以外…）、酒質としてはややボリューム高めの優良ヴィンテージとなった。9 月中旬からグッと冷え込むことがあり発酵不良を心配することもあった。朝晩の寒暖差は黒葡萄の色づきを早め酸も程よく残った。

2024 山梨（峡東エリア）

暖冬で萌芽が早まることを心配したが 2 月の寒気のせいか例年かそれよりちょっと遅い感覚があった。5 月の新梢伸長が一斉に来て、夜の雨が降ることがあったが昼にはよく乾いて病気の発生も少なかった。虫が多く、トラカミキリやトリバ、アカガネサルハムシの被害が割と多い年でもあった。

甲州市は 7 月後半から 8 月の中盤まで連日の猛暑が続き、特に夜の温度が高くデラを始めとしてグリ品種も着色がいまいちな傾向であった。しかし、この猛暑でベト病の多くは止まった。8 月の末には非常に遅くて強い勢力の台風 10 号（サンサン）の影響で雨が続いた。この影響で割れるブドウが増えたが、夜温が下がることによってヴェレゾンスイッチがようやく入る黒ブドウも多い印象。いずれにしても着色は山梨も長野も遅れていた。

デラウェアは熟す前に萎れ始め心配の種があったが、最終的には BOW! も祝用のデラも非常に良質な果汁だった。色味がやや赤く濃い果汁を仕込んだ。

2023 長野（塩尻）

2023 年は最も過熟なヴィンテージ。収穫は終わってもなかなか強い霜が降りる気配がなく洗馬では珍しく紅葉を見ることができた。この年に最も報告したいことは、忌まわしきカイガラムシが少ないことである。